

# 教師の ICT 指導力について

## —指導力転移の可能性について—

本田 敏明 赤間 文香 宇井 みずき 海野 詩央里 佐々木 雅実 會澤 瑞季

茨城大学教育学部 茨城大学教育学部生 茨城大学教育学部生 茨城大学教育学部生 茨城大学教育学部生 茨城大学教育学部生  
honda@mx.ibaraki.ac.jp 13p5002n@mcs.ibaraki.ac.jp 13P5003g@mcs.ibaraki.ac.jp 13P5004y@mcs.ibaraki.ac.jp 13p5012f@mcs.ibaraki.ac.jp 13p5101h@mcs.ibaraki.ac.jp

教師の ICT 指導力の重要性が指摘されながら、その具体的な内容や教師間のデジタル・デバイドの実態については必ずしも明らかではない。我々は特に教師のデジタル・デバイドの原因の分析と解決法についてグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）に基づいて研究し、その要因について明らかにしてきた。本発表では、ICT 指導力は教師の他の種々の指導力とどう関係するのか、指導力の転移の可能性との関係はどうかについて、スーパー・ティーチャーの活動データ（インタビューや録画、資料、観察などのデータ）を GTA の手法で解析した結果について発表する。

### 1. はじめに

文部科学省では、アクティブ・ラーニングなど予定される新しい学習形態の導入に応じて小中高校の教員が段階に応じて身につけるべき能力を示した「育成指標」の検討に乗り出すなど、教員能力向上が急務の課題となってきた<sup>(1)</sup>。特に、教員の ICT 指導力は悉皆能力として指摘されながら、その実態については必ずしも明らかになっていない。我々はこれまでこの ICT 指導力を中心にいかにしてその能力の育成・向上を目指すべきかについてグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）に基づく質的研究によって明らかにしてきた。本発表はその一環として、優秀教員の様々な実践活動を具体的に分析し、ICT 指導力との転移可能性を中心に分析し、その結果について発表する。

### 2. グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）によるこれまでの研究経過

#### 2.1 グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）とは

GTA は A. ストラウス、B. グレーザーによって創出された質的調査の方法論である。ここでは、ある概念を明らかにするのに、その概念に内包するカテゴリー、あるいはクラスを抽出し、それぞれのカテゴリーの特性を構造的側面やプロセスの側面などから階層化、関連づけを行いそこから仮説を導き出し、最終的に理論化していくという実施手順を取る<sup>(2)</sup>。

#### 2.2 デジタル・デバイドを引き起こす要因

これまでの研究では、教師のデジタル・デバイドの原因の分析と解決法について GTA に基づいて研究した。デジタル・デバイドを引き起こす要因は、PC を持つ年齢が遅いこと、不得意意識がある

こと、ネットワークコミュニケーションが少ないこと、1 日あたりの平均情報機器使用時間が短いことなどが挙げられることが明らかになった。しかし、解決法についてはその後の課題であった。

そこで本発表では、その解決方法を明らかにしつつ、ICT 指導力に関する要素と、1 人の優秀教員に関する要素について GTA の手法で解析し、それらを比較して指導力の転移の可能性を考察して構造化を行った。

### 3. 優秀教員の指導力転移可能性について

#### 3.1 教員の ICT 指導力に関する要素

我々はまずブレインストーミングを行い、教員の ICT 指導力に関する要素について案を出した。要素は、年齢、性別、情報機器の利用時間などが挙げられた。これらの要素は大きく 4 つのグループに分類できると考え、「個人プロフィール（学校での立場）」「プライベート（個人の ICT 利用）」「ICT のスキル」「優秀教員に必要な要素」に大別した。また、大別した 4 つのグループそれぞれについて要素同士の関係性を考え、仮の構造化を行った。また同時にこの時点でグループの内部だけではなく、他のグループの要素と関係する要素がないかということも検討した（図 1）。

#### 3.2 優秀教員に関する要素

次に、実際に茨城県の英語の優秀教員<sup>(3)</sup>が勤務している学校を訪問し、英語の授業研究を行った。そこでの授業内容の分析と資料の解析から優秀教員に関する要素を抽出した。これらの要素も 4 つのグループに分類できると考え「授業準備」「授業を進めるのに必要な技術」「生徒との関わり」「教材」に大別した。これもまた、教員の ICT 指導力に関する要素と同様に関係性を見出した（図 2）。

以下は学校訪問により得た分析結果である。

### 授業分析（例）

- ・一人ひとりに発言させる
- ・見回りを頻繁にし、生徒の状況を確認している
- ・授業で得られた知識を利用したゲームが取り入れられている
- ・生徒に授業に対しての意欲が十分見られる
- ・英語コミュニケーションに重点を置いている
- ・生徒が答えを間違えたときのフォローがしっかりとしている（その他約25項目）

### 資料分析（例）

- ・事前アンケートで生徒の実態の把握をしている
- ・教科書研究を細かく行い、長所を把握している
- ・日本人の英語学習の弱点を把握し、対策を立てている
- ・楽しい外国語活動を念頭においた授業計画
- ・プリントに授業の流れが記載されている
- ・HRT 主体の際と ALT 導入の際の授業差異を理解している（その他約20項目）

## 3.3 データの構造化

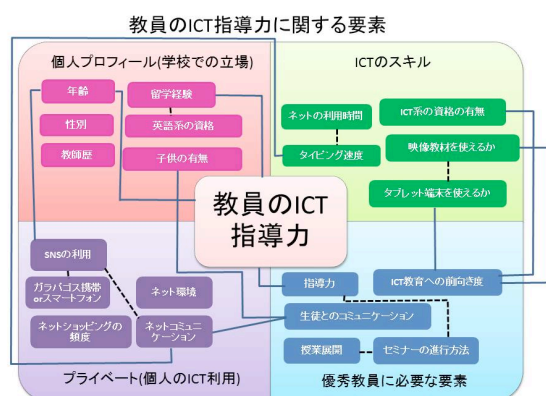


図1 教員 ICT 指導力に関する要素

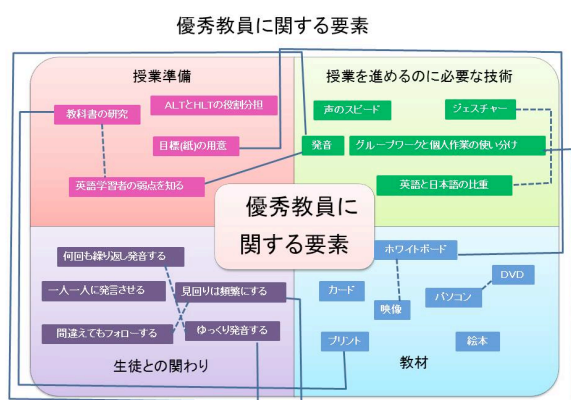


図2 優秀教員に関する要素

3.1, 3.2 でそれぞれ出した要素を図として表し、構造化を行った（図1、図2）。

## 3.4 教員の ICT 指導力の転移可能性

上述したデータから、図1、図2を比較した際に、優秀教員の指導方法は、ICTの指導に十分活用できることがわかった。たとえば、「生徒との関わり」に分類された「間違えてもフォローする」という項目は、ICTを初めて学習する児童や、ICTに苦手意識を持つ児童の気持ちを理解する力、すなわち「優秀教員に必要な要素」に分類された「生徒とのコミュニケーション力」につながるのではないかと考えられる。また、「授業準備」に分類された「教科書の研究」という項目は、「ICTのスキル」に分類される「タブレット端末が使える」につながると考えた。ICT教育が不可欠になりつつある今日において、タブレット端末などのICTは教科書としての役割も担うだろう。そのため、事前に教科書（タブレット端末）の長所と短所を把握しておく行為はICT指導力の転移可能性に大きく関係するのではないかと。

## 4. 転移の障害・促進要因と可能性について

以上の分析から、優秀教員の指導力とICT指導力との間には、転移の障害・促進要因があることがわかった。たとえば、今後のICT教育に教科書（タブレット端末）の知識は不可欠であるが、前回の研究で、教員の間には年齢や1日あたりの平均情報機器使用時間の差異がデジタル・デバイドを生み出していることがわかっており、いくら優秀教員といえども、それは例外ではない。そのため、これらは転移の障害要因になっている。

また、前述したように、優秀教員の指導力や、事前に教科書（タブレット端末）の長所と短所を把握しておく分析力は、そのままICT指導に活用できるため、これらは転移の促進要因になっている。

## 5. おわりに

なお、より詳しいデータ解析やここで詳述できなかった内容については発表当日に紹介したい。

### 参考文献

- (1) <http://www.asahi.com/articles/DA3S11740380.html>.
- (2) <http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/grounded.html>
- (3) 茨城県優秀教職員（ティーチャー オブ ティーチャーズ）  
<http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/welcome/kyoshoku/tot/index.html>